



2012年9月12日放送

漢方頻用処方解説 釣藤散①

千葉大学大学院 医学研究院 和漢診療学講座 岡本 英輝

今日は皆さんに、漢方頻用処方解説シリーズの釣藤散についてお話ししたいと思います。

1 主な効能

ツムラのエキス製剤における効能効果は、「体力中等度あるいはやや低下した中年以降の人で、慢性に経過する頭痛・肩こり・めまいなどを訴える場合に用いる。①朝方あるいは目覚め時に頭痛・頭重感のあることが多い。②のぼせ、耳鳴り、不眠、眼球結膜の充血などを伴う場合」となっています。

2 出典・処方名の由来

出典は宋代の医家・許叔微によって、12世紀半ば頃に編纂された『普濟本事方』です。その中の頭痛頭暈門に「肝厥の頭暈を治し、頭目を清する」と記載されています。肝厥とは何かと言いますと、矢数道明著『漢方後世要方解説』では、「肝厥とは肝邪張熾して厥することにして、此の証多く平素隠虚肝旺にして惱怒し易きに因る」「王冰は厥とは氣逆上するを謂うなりと、肝の邪盛にして氣逆上するを肝厥という」と解説されています。つまり条文を要約しますと、「平素から肝陰虚になりやすく気が上衝するタイプで、頭がくらくらしたり重くなったりするのを治して、頭や目をはっきりさせる」ということです。

釣藤散という処方、構成生薬のうち釣藤鈎が君薬であることから名づけられたと考えられています。実は、他にも釣藤散と名づけられた同名異方が中医学の中では複数存在しますが、釣藤鈎が君薬である以外は生薬構成が全く異なります。日本の漢方の中では、こ

れからお話しする生薬構成の釣藤散が使われています。

3 生薬構成

釣藤散は釣藤鈎、橘皮（あるいは陳皮）、半夏、麦門冬、茯苓、人参、菊花、防風、石膏、甘草、生姜の 11 味から成ります。原典ではこれにさらに茯神が入ります。茯神は茯苓のうち、マツの根を抱いたもので、茯苓よりも特に安神作用、つまり精神を安んずる作用が強いと言われていています。

矢数道明は「此の方は竹葉石膏湯より竹葉・粳米を去って、釣藤鈎・橘皮・茯苓・防風・菊花・生姜を加えたものである。即ち虚羸して気逆するを鎮静する薬能がある」と述べています。虚羸とは、体力が衰えて痩せてくることです。また、釣藤散は構成生薬が六君子湯と多く重複しており、補脾作用が期待できます。あるいは二陳湯が入って脾胃の痰飲を化すという見方もできます。平肝止癥、つまり肝を平らかにして筋肉の痙攣やひきつりを止める薬効がある釣藤鈎を含み、微小循環障害の改善が期待できることから、補脾しながら脳血管性の病態の改善が期待できます。

その君薬の釣藤鈎は、アカネ科カギカズラの茎にあるカギ状のトゲです。カギカズラはいわゆるつる草の一種で、このカギ状になったトゲをひっかけながら他の木などに巻きついて上り成長していきます。

釣藤鈎には「心熱を除き、肝気を平らげ（つまり肝の陽気を平らかにし）、風を去り、驚を定む（つまり過敏な状態にあるのを鎮める）」という薬能があります。さらに釣藤鈎には、用量依存的に血管を拡張して血圧を下げる効果があることが分かっています。ただ、長時間煎じると効力が減弱するため、煎じ薬では火から降ろす直前あるいは 5 分ほど前に加えることになっています。しかし、現在のエキス剤に含まれる釣藤鈎は、その製法のため、降圧作用がかなり弱くなっていると考えられています。

臣薬の菊花は、キク科のキクです。別名甘い菊花と書いて「甘菊花」とも言い、栽培したいわゆる食用ギクが用いられます。後でまたお話しする百々漢陰著『梧竹楼（ごちくろう）方函口訣』の釣藤散に関する著述の中でも、菊花については次のようにわざわざ取り上げられています。「甘菊（つまり甘菊花）は堅田の菊と云うものにて、小輪純黄色にして花びら皆くたになりたる者ゆえ、くた菊とも云う。浸し物にして食用にもするゆえ、料理菊とも云う。江州堅田（つまり現在の滋賀県大津市堅田）の名産なり。これを真の甘菊とす。此の品を撰んで用うべし。尋常薬店にてひさぐ（普通の薬局で売られている）ものは、おおむね山野へ自然生の菊に類せる（野山に自然に生えているキクの類である）。至って小輪の細花のものを甘菊花と云って偽りひさぐ。此れはヨク苦というものなり。単に無効のみならず毒あり、薬用とすべからず。吟味して使うべし」と述べています。

ヨク苦は苦ヨクとも言いますし、あるいは「野菊花」「島寒菊」といって野山に自生しているキクで、菊花つまり甘菊花とはやや薬能が異なると言われていています。そのため、百々漢陰もそのように述べたものと思われそうですが、日本では慣習的にどちらも菊花として用いられています。菊花の薬能は「目を明らかにす」といわれ、視力改善作用があると言われていています。他には抗炎症作用と向精神作用が知られています。特に釣藤鈎と菊花の組み合わせ

わせで肝火を除き、肝風を鎮める作用があり、高血圧やイライラによる頭痛・頭重・ふらつきなどに用いられます。

同じく臣薬の防風はセリ科の多年草、ポウフウの根です。名前の通り「風邪を防ぐ」と考えられており、表を解し、風湿を除いて痛みを止める作用、消炎作用、止瀉作用があると考えられています。釣藤散においては、上焦の風邪を去り、頭痛目眩を治す役割を果たしています。

佐薬は人参・茯苓と考えられています。人参はいわゆる朝鮮人参で、補気・健脾・安神・止渴などの薬能を持ち、茯苓はサルノコシカケ科マツホドの菌核で、利水・健脾・安神などの薬能を持ちます。釣藤散においては、この両方で元気を補い水を巡らし脾を補います。

ほか、使薬の石膏は虚熱を清して鎮静鎮痙作用を助け、麦門冬は心を清し肺を潤して滋陰し、陳皮・半夏・甘草・生姜は水を巡らし湿痰を除いて脾胃を健やかにします。全体的には、湿痰を除きつつ中枢性の鎮静・鎮痙作用を期待している薬味構成と言ってよいかと思います。

4 古医書における記載

『婦人大全良方』には『普濟本事方』と同一の条文、薬味で記載されていまして、薬方の注釈として「下虚する者は腎虚なり。故に腎虚すれば頭痛す。上虚する者は肝虚なり。故に肝虚すれば頭暈す。徇蒙（眼球が細かく動いて周囲が見えなくなる。眼振のこと）する者は、物を以って其の首を蒙うが如く、招搖は定まらず。目眩、耳聾（聴覚低下）は皆、暈（曇る・ぼんやりすること）の状。故に肝厥頭暈は腎厥頭痛と同じからざるなり」とあります。

分かりづらいので要約しますと、「下焦が虚する者は腎虚で頭痛となる、上衝が虚する者は肝虚で頭暈となる。眼振する者は、物で首から上を覆われているがごとく、ふらふらしてしまう。めまいや聴覚低下のある者は皆、ぼんやりしてふらふらする状態となる」というふうになり、腎厥の頭痛ではなく、肝虚で上虚している頭暈が主治であると述べられています。

福井楓亭著『方読弁解』には、「主治に肝厥頭眩と云えり。肝厥は上衝ありて忿恚（怒ること）し易きの状、癩瘕の如きを云う。且頭暈する者、此の方を用ゆ、此等の症、世医抑肝散を用いる者ありと雖も、此の方を以っての当とすべし。又通じて癩症に用ゆ」とあります。

これも分かりづらいので要約しますと、「気の上衝があつて怒りやすい者で、頭がくらくらする場合や朝方に頭がぼんやりする者に用いる。これらの症状に抑肝散を用いる医師がいるが、釣藤散のほうが適当である。また、癩癩持ちで怒りっぽい人にも用いる」ということです。

浅田宗伯著『勿誤藥室方函口訣』には、「俗に所謂癩症の人、気逆甚しく頭痛、眩暈し、或は肩背強急、眼目赤く、心気鬱塞する者を治す」とあります。百々漢陰著『梧竹楼方函口訣』には、「此は肝欠頭暈と云いて素稟肝木の気亢る人の目眩頭暈を治する方。又転じて頭痛に用う。其の症左のこめかみの処より目の魚尾の処へ引き付けて痛む者によくきく也。

暈も痛も同様の理也。何れも肝気の逆よりくる症を治する也」とあります。

これも要約しますと、「釣藤散は、普段から肝虚証で気が高ぶりやすい人のめまいや頭がぼんやりするのを治す処方であり、転じて頭痛にも用いる。頭痛は左のこめかみから目じりにかけて引き付けるように痛む者によく効く。ぼんやりしたりくらくらしたりするのも、痛みも、同様の理由から来ている、いずれも肝気が逆上して生じている症状を治す」となります。